

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年作文の部 優秀賞

ぼくの大切な友達

広陽小学校六年

名竹 なたけ

聖治 せいじ

ぼくには、大切な友達があります。小さいころからよく遊び、楽しい事をする時は、必ずといっていいほど一緒にいました。家も近く休みの日になると午前、午後とほぼ一日じゅうどちらかの家に行って遊んでいたり外で遊んだり、とても仲の良い友達です。

ぼくは、ある時、その大切な友達とケンカをしてしまいました。

ケンカの理由は今、思いだしてみても、とつてもくだらないことです。それは、小さなことで意見が対立して、大きなケンカになってしまったのです。でもなぜかその時は、意地を張ってしまい二人ともゆずりませんでした。ぼくはだんだんいらついで今思えば、とてもひどい事をくり返しくり返し何度も友達に言ってしまったようです。その時はケンカの真最中だったので、どんなにひどい事を言ってもその時は、自分は悪いなんて思いもしませんでした。それに、ムカムカしていたのでひどいことを言えば言うほどすつきりしていった気がしていたのです。

でも、なんだか後味がとても悪かったのを覚えています。

それから、ぼくの生活は、すっかり変わりはててしまいました。学校に行く時も帰る時も休み時間に遊ぶ時もいつもはとても楽しいのに、ケンカ中はなんだか味気ない感じがしてなりません。いつもはすぐ横にいる友達がいらないのです。

楽しくおしゃべりする時も、おかしい事を言っただけで笑う時もなんだかいつもとちがうなと感じます。

でもぼくは、一人、友達がいなくてただでそう感じるんだという事には、なかなか気づきませんでした。

しばらくして冷静になった時、ケンカをしている時に自分が言ったひどい事を何度も思い出しなんだか胸が痛むような感じがしました。

なんであんなにひどい事を平気で言ってしまったのか、あの時にはすつきりしたと思ったのに、今さらなんで気になり始めるのか、なんだろう。考えなきゃと思うのに考えることからも、にげてしましました。

ある日、ケンカした友達が学校を休みました。いつも元気であまり休む事がなかったのにぼくはどうしたのだろうと心配になりました。ぼくは、家が近いので、先生にケンカ中だからと断ろうとしたけどぼくが、休んだ時はいつもその友達が持つてきてくれていた事を思い出しました。

ぼくは、かくごを決めてその友達の家に行きました。でも友達はねていて会えませんでした。友達のお母さんにプリントをわたすと笑顔で「いつもありがとう」と言われました。その時、ぼくはドキッとしました。自分がその友達に言ったひどい事を思い出してしまつたからです。そこから初めて真剣にその友達とのケンカを考え始めました。なぜあんなひどい事を言ってしまったのか、自分が言われたらどう思うのかをずっと相手が悪いから自分から謝るもんかと思つていた事が、すぐくだらない事のように、思い始めました。

ぼくは、友達の体調が良くなって学校に来られるようになった朝一番に謝る事を決意しました。

次の日の朝、友達は元気に集団登校に出て来ました。ぼくは勇気を出して「ごめんなさい。この間のケンカの時ひどい事を言つてその後もなかなか謝れずに本当にごめん。」と言いました。すると友達もてれくさそうに「ぼくもごめん。昨日プリントありがとう。」と言つてくれました。ずっとケンカして、しゃべらなかつたのに、この会話だけで、すぐケンカする前にもどれました。ぼくは、とっても気分が良くスッキリとしました。こんなことならすぐ謝れば良かったと思ひました。

それからの毎日は、ケンカしていた時の何十倍も楽しく感じる事ができました。友達一人の大切さ、素直に謝る事の大切さを改めて気づく事ができました。友達とはケンカもしてしまうけど、友達の大切さに気付いたぼくはすこし、成長できたんじゃないかと思ひます。

これからもこの気持ちを忘れずにいようと思ひます。